
魔法の国のティカ

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Zコード】

N2177BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚されたまま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囮まれてうろたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

00 わたしのハゲ抹茶

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」

残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなつて連呼した。

今外に出たら暑いだろ? あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷つた後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買ひに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー?」

一階の部屋から階段を降りていいくと、リビングにいる母親から声をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行つてくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買つてきてよ」

「うん、分かった。行つてくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……あつー……蝉づるー……」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどコンビニに着く

と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイスが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。

すると、目の前にきらきら光るもののが見えてきた。

やだ、ガラス? 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かず自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素つ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるときなり停止した。

「おおおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るもののがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まる、千花はまったく見知らぬ場所にいた。それも、どう見ても室内。

千花が呆然としていると、田の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビニ袋を取り出した。

緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言つていいと思う。千花が今までお田にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろ？。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやつと千花ははつと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てる男に向かつて叫んだ。

「ちよつ、わたしのハゲ抹茶！ 勝手に食べないでよー！」

「禿マツチヨ？　おかしな名前だな。もつ一つあるだりつ、それを食べる」

「なんであんたに指図されなきやいけな」のよ、禿ドロボー…」

楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？　俺は禿げてない。…ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですつてえええつ」

あまりの言われように、千花は思わずきいにいと叫びたくなる。

「いらないのならそちらも俺が貰うが」

「！　食べる、食べるわよつ」

千花は慌てて男からコンビニ袋を奪い返した。そして溶けかかつたいちごのかき氷をかきこむ。

「う

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「ひるむことよ！」

一聲叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目ファンタジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているところおかしな構図が出来上がったのである。

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なかに突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろつか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うなと言つたはずだが。またおまえは使つたのか』

千花のアイスを奪つた男に文句を言つているようだが、なんとしやべつているのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のような格好をしている。

いや、それ以前に「こはビコなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じやなかつた。

千花の疑問には一人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言つた。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法つてなによ？ ファンタジー小説とかゲームじやあるまいし」

いくら田の前の男の格好がファンタジーでも、言つてることまでそんなことつてある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が田の前の男から更に距離を取る。

『……なにを言つてるのか分からんな。ひょつとして異世界の者か？』

『』

「そうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して田の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……おまえ、なんてことをしてくれたんだ。異世界の者を召喚しただろ。今すぐ帰すんだ』

「そういうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になつてもら

わなければ

「弟子つてなによ？ なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子つて、なにかの伝統芸かなにかだらうか？

なんにせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだつた。

「後で説明する。おまえは少し黙つてろ」

「なつ」

そつけなく男に一蹴されて、千花は氣色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだらう。それをじかうの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだらう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主である」とには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ

「魔力つてなによ？ 勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなつた。
な、な、なによこれーつ！？

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだらう。」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からぬが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるよつに話して欲しいものだ。そう思つて、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壯年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なつ、なにあれ？ なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄つて左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさつた。

しかし、男がなにかを呴いたとたん、体が動かなくなつて千花は焦る。

な、な、なんだこれーー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろ？……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれ？ 話が分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かつて短くなにかを呴く。

「……ちょっと、ここはどこなのよーー！？」

話せるようになつたとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかつたか？」

「そう言つわけにもいかないだろ？ 少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？ 聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」「いせかい。異世界。異世界！？」

「あははは、冗談きつついわ～」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたつて真面目な表情だ。

「……すぐには信じられないのも仕方ないだろ？」

壮年の男がなにかを呴くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちょ、うそつ！ 足、体浮いてるつ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」
カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての…」
「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」
壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？ ここはヨーロッパかなにか？」
「もしかしなくても城だが、おまえの言つようになヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてはすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国を中心。魔法大国の顔もある」
壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。
「さつきから魔法、魔法つて……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？ サつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言つと一人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なつ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかな

い」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんとい

う

偉そうに言われて、千花はカチンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗つたらどうよ？」

「……なんだと。まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ」

魔術師？ やつぱり鳩とか出すあれじやないの？

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな

「ティカ・サトー？」

「ティカじやなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。負ければティカと呼ばせてもらつていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしようがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、ティカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子ってなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポーツジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕つ

た。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。ティカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですか？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをかの世界から呼び寄せた。どうしても帰りたいなら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だがな」

「ちょっと、勝手なこと言わないでよ！　わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言つてないわよ！　わたしの意思はどうなつちやうわけ！？」

「はっきり言えればない」

きつぱりとカイルが言つと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいか？　まさか召喚魔法で弟子を呼びだすなんて普通思わんだろう」「う」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの一人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、こは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで呼びだしたわけね？　それで、その理由は弟子を取ることだったと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあつさりと頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないつてことよね？」

「やつじうことになるな。まあ、諦めろ」

諦めろと言われて、そう簡単に諦められるかつての…

「 そ う な ん だ 一 。 ふ ふ ふ 」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

「……なにをするー？」

カイルは打たれた頬を押さえて一瞬呆気に取られた後、千花に怒鳴つた。

「それはこいつの台詞よ。あなたのやつたことは犯罪じゃないの。

誘拐よ、誘拐」

千花が腰に手を当てて声を大にして主張する。

「まあ、そういうことになるな」

シモンが鷹揚に頷く。

「あなたを警察……があるかは知らないけど、警備の人々に突き出してやるんだからー」

「出来るものならやつてみる。言つておくが俺は城に顔が利くぞ。多少のことなら揉み消せる。それに、どこから見ても異国の者のたわごとを信じる人間がどこにいるんだ」

この悪党！

ギリギリと歯ぎしりしたい思いで、千花はカイルを睨みつける。「そんなことより、素直に俺の弟子になれば生活の保障はされるし、いつかは帰れるぞ」

「生活の保障なんて当たり前でしょー。そつちが喚びだしたんだからー」

「弟子にならない場合はおまえの生活の保障は一切ないからそのつもりでいる」

「ちよつとー」

ふざけんなー。どれだけ自分勝手なんだ。

憤った千花はカイルよりも立場的に偉いはずのシモンに助けを求める。

「じゃあ、シモンさんどうにかしてくださいー。」

「すまない、それはちょっと出来かねる

「な、なんですか？」

「こいつは俺の弟子だが、実力は俺をとつに上回つてゐるんだ。だから、君を保護した場合、俺がこいつにどうにかされる可能性がある」「おい、こいつには師匠を敬う気持ちはないのか！」

師匠を師匠とも思つてないカイルに思わず千花が頭を抱える。「でも、シモンさんから仕官できないなら弟子を取れつて言われたつて」

「それは、第一王子の『命令だからだ。俺だけの命令ならば、こいつは聞かない』

「……」

命令を聞くのは、王族だけとかどんだけ俺様なんだ。……けど、シモンさんもちよつと情けなくない？

「あ、じゃあ、その第一王子様とやらこ、わたしを帰すよつに掛け合つてください」

「そ、それは、少々無理だと思つが……」

ちえつ、やつぱり無理か。

千花ががつかりしていると、カイルが更に言つてきた。

「俺の弟子になるなれば、出来るだけ早く帰せるよつに努力してやる。生活面も待遇を良くするぞ」

「……どんなにわたしが帰りたいつて言つても、帰してくれないんだよね？」

「ああ、おまえがこれほどの魔力の持ち主でないならすぐには帰していたが、俺を上回るほどの魔力の持ち主だからな。これなら第一王子も文句は言つま」

……その第一王子つて人もまさか召喚してまで弟子を取らうとするとは思わないと思つよ。

「うう……」

千花は頭を抱えて唸る。

ああ、どうしよう。

ムカつくけど、『』にいつの話に乗るしかないのか。乗らない

場合は、野垂れ死にコースっぽいしなあ……。こんな訳の分からないことで野垂れ死には嫌だ、うん。

千花は頷くと、カイルに聞く。

「……敬語は使わなくちゃ駄目?」

「まあ、なくともかまわない。俺も師匠に使ってないしな。なんならカイルと呼び捨てにしてもいい」

「……ええ?」

俺様なのに、カイルと呼び捨てにするのはOKなのか?
千花がまじまじとカイルを見返すと、なぜか彼は頬を染めてそっぽを向いた。

「それでどうなんだ。俺の弟子になるのか、ならないのか?
「うう、しょうがない、弟子になるよ。……本当にちやんと帰る方法教えてくれるんでしょう?」

「しかるべき時が来たらな。まあ、数年先のことだと思うが」「数年先なんて困るよ! それじゃ元の世界に戻った時にわたし死んだことになつてるとかもしれないじゃない」

あれ、行方不明者の死亡確定って何年だけ。千花は叫びながらもそんな悠長なことを考えていた。

「それはおまえ次第だ。せいぜい頑張ることだな」「言われなくても頑張るよ」

死亡確定だけは嫌だ。なんとしてもそれまでには家に帰らないと。千花は拳を握つて決意を新たに頷くと、カイルに言つた。

「じゃあ、嫌だけど、ここにお世話をなることにする。すつゝく嫌だけど」

しつかりと嫌だけどのところを千花が強調すると、カイルは顔をしかめた。

「おまえの部屋はここだ」

カイルに案内された一階にある部屋は、元の世界の千花の部屋よりも三倍は広かつた。

「わあ、可愛い部屋ー」

その部屋の壁には爽やかなグリーン系の壁紙の上に同系色のボーダー壁紙、またその上に控えめに小花を散らした壁紙が貼られていた。

備え付けのアンティークな机と椅子。チェストにベッド。確かに待遇はいいようだ。

「なにか必要なものがあるなら女中のメリサに言つとい。すぐに揃えてやる」

「うん、そのメリサさんて人はどこにいるの?」

千花が聞くと、カイルは部屋にチェストの上に置いてあったベルを取つた。

「用があるときはこのベルを鳴らせ。これはおまえの部屋専用のベルだからすぐにこの部屋に来る。試しに鳴らしてみろ」

「うん」

素直にベルを鳴らすと、程なくして四十代くらいの髪をひつめた女性が部屋のドアをノックして現れた。

「お呼びでしょうか」

「ああメリサ、弟子を取つたから紹介する。ティカ・サトー、歳は

……いくつだ」

「十六だよ」

「メリサで」やります。以後、よろしくお願ひいたします

「あ、はい。よろしくお願ひします」

メリサは千花に頭を下げるが、千花も慌てて彼女に下げ返す。

「十六か、せいぜい十四、五歳だと思っていたが幼く見えるな」

カイルが千花の全身をまじまじと観察するが、千花にしてみれば、幼く見られがちな日本人の大体の年齢を当てる方が驚きだ。

「顔だけ見れば十二くらいだが、おまえ、体つきだけはいいからな

いやに長々と見てると思つたら、セクハラかよ！」

「……殴つてもいい？」

「殴つてから言つな。さつきの平手といい、凶暴だな、おまえ」

殴られた頭をさすりながらカイルが愚痴る。

「まあ、仲のよろしいことで。師弟と言つよつ、まるで恋人同士ですね」

「……そう見えるか？」

「冗談でもやめてください」

「まんざらでもなさうなカイルがちょっと怖い。千花は慌ててメリサに認識を改めてもらつた。

「まあ、残念です。カイル様はおもてになるのに恋人はいらっしゃないので、私たち使用人はやきもきしているのですわ。ティカ様がその気になりましたら、いつでもこのメリサにお申しつけください。精一杯応援させていただきます」

カイル、もてるのか。確かに外見は超絶美形だけど、性格がアレすぎるだろう。

千花は世の中の不条理をを呪いながら、期待に満ちた目で見てくるメリサに全身全霊で否定した。

「……いや、そんな気はまったくないですから！」

「……そうですか。本当に残念ですね。……それはそうと、ティカ様お召し替えをなされませんか？ そのお洋服はこここの気候には少し涼しそうなかもされませんので」

「確かにちょっと寒いかも」

ぴつたりした半袖Tシャツにふくらはぎ上までのパンツにサンダルという格好なのだが、先程まで汗をかいていたせいもあり、かなり肌寒い。

「それに肌や体の線を少々露出させすぎですわ。カイル様には目の中の毒です」

「いや、むしろ田の保養だが」

……おまえは黙つてろ！ と千花は有無を言わせない笑顔でカイルを黙らせると、メリサに向き直つた。

「はい、着替えます。あの、汗をかいてたので、出来ればお風呂に入りたいんですけど、いいですか？」

「はい、すぐにご用意できます。こちらへどうぞ」

メリサに案内された浴室はゆつたり出来る浴槽やシャワーもあり、使い方は日本にあるものとそう変わらなかつた。

うつわー、高そうなお風呂ー。まるでホテルみたい。……さすがにライオンの口からお湯は出ではいなければ。

千花がいかにも高級そうな金の蛇口やシャワー、ヘッドを眩しげに見ていると、メリサに着替え一式とタオルを渡された。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、どうもありがとうございます」

千花がメリサを見送つていると、約一名、入浴に大変邪魔な者が残つていた。カイルだ。

「カイル、わたし今からお風呂に入るんだけど。とつとと出でていってくれない？」

なんとか笑顔で千花は言つが、その頬はひきつっていた。

「なんだ、せつかく背中を流してやろうかと思つてたのに」

カイルのその言葉に、千花はぞわつと鳥肌を立てる。

せつかく平和的に言つてやつたのに、これは体に直接分からせないと駄目なようだ。

「出でけ　つー」

千花はカイルをボコボコに殴ると、浴室のドアの鍵をしつかりと閉めてから、異世界での初お風呂を堪能した。

少し冷えてきていた体もすっかりほかほかになつて千花は上機嫌で風呂から上がつた。

タオルで体を拭くと、たちまち水分が吸収されていつて千花は驚いた。

試しに洗つた髪の毛を拭いてみると、こちらもほとんど乾いてしまつた。おまけに髪や肌に必要な水分までは吸収しないらしい。

「す」「ーい、ドライヤーいらぬいや」

異世界の高性能なタオルにすっかり感心しながら千花はメリサから受け取つた着替えを広げてみた。

下着は千花の世界とそつ変わらないよつだがブラはないらしい。その代わりにキャミが長くなつたようなものがあつた。……つまりこれを着るといつことらしい。ちょっとと心細い感じだが、仕方なく千花は下着を身につける。

その上に桃色のドレスのような長いワンピースを着る。太腿までの長さのストッキングを履いた後、ふくらはぎまでの編み上げブーツを履ぐ。

「うわあ、馬子にも衣装かもー」

脱衣所の鏡に全身を映して、千花は前や後ろを確認する。この格好だけで何割り増しか自分が可愛くなつたよつな気がするから不思議だ。

普段あまり女の子らしいに装いはしない千花だが、それでも今自分の格好にはうきつけした。

「まあ、ティカ様よくお似合いですわ」

ティカが風呂から出るのを待つていたらしいメリサが、千花の姿を見て褒めた。

「あ、どうも。メリサさん、お風呂ありがとうございました」

「いいえ、お入りになりたい時はいつでもお申し付けください。そ

れはそうと、ティカ様が出になつたら、カイル様が部屋まで来る
ようにとおっしゃつてましたわ」

「分かりました」

メリサに案内されてカイルの部屋に入つた千花は、シモンがいる

のを見て、そういえばいたんだつてと彼に失礼なことを思った。

「ああ、とてもよく似合つてゐる。これならこのまま王宮に向かつ

ても問題ないか」

「お、王宮ですか？」

いきなり大仰な話題になつたので、千花はびっくりした。

「第二王子に俺が弟子を取つたことを報告しなければならないから
な」

「こともなげに言うカイルに千花は反論する。

「で、でも、わたし、王子様に会うのに必要な礼儀作法なんて全然
知らないよ！？ そんなんで大丈夫なの？」

それどころか、敬語自体できるかどうかも怪しいくらいだ。

「その点は全く気にしない人物だから大丈夫だ」

「…… そうなの？」

「ああ」

第二王子様とやらはその身分によらず、随分気さくな人物らしい。
そう心配することでもないと理解した千花は思わずほつと息をついた。

しかし、王子様に会うなんて大事なのに、簡単に会うと言つて、この一人は結構な重要人物なのかもしれない。

「それでは行くか」

カイルはちよつとそこまで、のよくな感じで言つと、三人は簡単に城の前まで移動した。

目の前にそびえる白い美麗な城に、千花が思わず口をあんぐり開けて見とれないと、カイルが彼女の額を指先で小突いた。痛みはなかつたが、いきなりだつたので思わず千花は仰け反つてしまふ。

「なにすんのよつ」

「馬鹿みたいに口を開けて上を見るな」

「！ 馬鹿みたいで悪かったわね！」

確かに間抜け面だつたろうと想像できるだけに、千花は真っ赤になつて怒鳴つた。

シモンが城の衛兵に田をやると、彼らは頭を下げて城の入り口から退いた。

うわあ、顔バスかあ。

その様子を少々驚いて千花は見ていた。

シモンはカイルにはかなわなくて正直情けないと思つていたが、案外偉い人なのかもしれない。

「……あの、シモンさんてもしかして結構偉い人なんですか？」
恐る恐る千花が上目遣いで聞くと、とんでもない返答がこともなげに返ってきた。

「……ああ。一応、この国の魔術師団師団長をしている

「そ、それって結構な重要人物つてことですか？」

「まあ、一応な。しかし、俺より強大な魔術師が身近にいるから代替わりさせようとしたんだが……、失敗だつたようだな」

シモンは深い溜息を付くと、カイルを見た。

「……誰がそんな面倒な役目に付くか。それに俺は一人で行動している方が性に合っている」

カイルがうんざりとした様子でぱつさりと切り捨てる。

「しかしだな……、稀代の魔術師であるキース・ルグランの再来と言われるおまえを放置しておるのは国家の損失だぞ。これは殿下も同じご意見だ」

「……ふん、無駄なことを」

千花には理解できない言葉もあつたが、シモンは弟子であるカイルを後継者としたいようだ。

そうこうしているうちに一つの立派な部屋の前で一人が立ち止まつたので、千花も慌てて止まつた。ひょっとして、ここが第一王子の部屋だろうか。

「エドアルド殿下に目通りを」

第一王子の名はどうやらエドアルドといひらしい。

シモンが近衛と思わしき人物に声をかけると、その彼は「少々お待ちください」と言って中に伺いに行つた。

「今の人つて、近衛の人？」

王族の人を守つているならきっとそつだらうと思つて、千花は口にする。

「ああ、近衛騎士だ。おまえは初めて見るか」

カイルと小声で話していると、その近衛騎士が戻つてきた。
「殿下がお会いになるそうです。どうぞ中へお入りください」
促されて中に入ると、華美すぎない上品な部屋の中央に、二十代前半と思われる一人の人物が立つていた。

その人物は印象的な藍色の瞳をしていて、長い見事な金髪を緩く三つ編みにして前に垂らしている。美麗で、かつその上品な所作はまさに王子様というしかなかつた。

「……まさか、本当に弟子を見つけてくるとはね」
王子はカイルを見て呆れたように溜息を付いた。

「ティカ、殿下に挨拶を」

シモンがそう言つてくるが、千花にはどう言つていいのか分からなかつた。……ので、自然と無難そうな挨拶になる。

「ち、いえ、ティカ・サトー、十六歳です。よろしくお願ひします」
ペコリと千花が頭を下げるが、エドアルドが微笑んだ。

「十六歳か、若く見えるね。それに変わつた顔立ちだ。どこの国の人だい？」

エドアルドは本当に気さくな性格らしく、得体の知れない千花にも簡単に声をかけてくる。

「え、えーと、日本です」

「ニッポン？」

エドアルドが聞きなれない言葉を聞いたといひように、首を傾げる。

「ニッポン、もしくは二ホン。またはジャパン」

「二ホン？ ジャパン？ 聞いたことないな」

「それはそうだろうな、この娘は異世界の者だからな」

「カイルが王子に対して不遜な口を利くのを千花は他人事ながらも、ついハラハラしながら聞いてしまった。

「カイル、おまえ……まさか異世界召喚をやつたのか」

「異世界探索をしていたら、たまたま俺より魔力の高い娘を見つけてからな。俺の弟子になることを了承させたし、これで文句はないだろう」

「いや、その娘にも家族がいるだろ？。すぐ帰してやつた方がいいんじゃないか。なんなら、あの話はなかつたことにしてもいい」エドアルドが士官の話を立ち消えにするとまで言つたことに、千花は感動した。

「うわあ、なんていい方なんだろう。わたしを家に帰せつて言つてくれたよ。鬼畜なカイルとは大違い。

「今更だな。俺はこいつに魔術を教えるつもりでいるし、帰す気は全くない。ティカが帰ることがあるすれば、自力で異世界へ戻る時だけだ」

カイルは感激しているティカの気分を地に墜とすようなことを言った。どこまでも勝手な男である。

「しかし、それでは帰るのに何年もかかるぞ」

「……それはティカの努力次第だな。魔力に関してだけは全く問題ないから、それほどかからないかもしけないが」

カイルが肩を竦めると、エドアルドは千花自身に興味が沸いてきたようだった。

「へえ、そんなに魔力があるのなら、ぜひ見てみたいな。確か魔力を計る魔道具があつただろう」

「ああ」

カイルは水晶を手元に召喚せると、それを千花の両手に乗せた。

「えつ？ エツ？」

訳が分からず千花が慌てていると、カイルが説明した。

「魔力を計る魔道具だ。それに念を集中せり」

「念を集中させろって言われても……」

そんなことをやつしたことのない千花はうろたえてただ周りを見渡す。三人の男達は千花の動向を見守つたままだ。

「やり方が分からぬなら、その水晶をじつと見つめているだけでいい」

ああ、それなら大丈夫だ、と千花はほつと息をつくと、水晶に意識を集中させた。

その途端、水晶が虹色に輝きだして千花は思わずそれを取り落としそうになつて慌てる。

「えええ、なにこれっ！？」

そしてとうとう虹色の輝きがエドアルドの部屋全体を眩しく照らしたかと思つと、いきなり千花の手元の水晶が跡形もなく消えた。

先程までエドアルドの部屋を眩しく照らしていた光は消え去り、元の静寂な室内に戻つていた。

「き、消えちやつた……」

手元の水晶がなぜか消滅してしまつたことで、千花はうろたえる。

「……測定不能か」

カイルが少し考え込むように顎に手を当てる。

「いや、まさかそんな者がいるのか？ それにあんな光の色は初めて見た」

シモンが驚愕を露わにして千花を見る。それに倣つようにエドアルドも興味深そうに彼女を見た。

「これは、それだけ彼女の才能が桁違いだということでいいのかい、カイル」

「……まあ、そうだな。俺もまさかここまで魔力の持ち主だとは思わなかつたが」

「ええ？ それ始めから分かつてたんじゃないの？」

「大体の魔力は予測することは出来るが、正確な魔力の量が分かるわけではないからな」

「……なんかいい加減……」

ぼそっと千花が漏らした一言に、カイルが冷ややかな視線で「なにか言つたか」と返した。

「別にー。……それはそうと、魔術師としてはわたしの魔力は合格つてこと？」

「いや、合格どころか、今すぐにでも魔術師団に入団してもらいたいところだな」

なぜかカイルではなくシモンが口を輝かせて言つ。

「はい？ でも、わたしカイルの弟子になるんじゃないんですか？」

「いや、これだけの才能を埋めておくのはもつたいない。いずれは

史上初の女性魔術師師団長も夢ではないぞ」

「いや、あの……わたしは家に帰りたいんですけど。そんな役職に就いたら帰るに帰れないじゃないですか」

割と強引なシモンに千花は内心たじたじになる。

第一、そんな人の上につく役目なんて面倒だ。

「ここに永住したらしいじゃないか。そもそも何年も行方不明になつていた人間が元の世界でうまくやつていけるとはあまり思えないが」

「！ 酷いです！ 第一、シモンさんがカイルに弟子を取れつて言つたから、こんな訳の分からぬ状況になつたんじゃないですかつ！」

先行き不安なのは理解していたが、さすがにこれはあんまりだ。思つていなかつたところでのシモンの暴言に憤り、千花は瞳に涙を溜めて怒鳴つた。

握つた両手の拳が怒りのあまりぶるぶると震える。暴力はいけないと分かつてゐるが、すぐ殴りたい。

弟子が弟子なら師匠も師匠だ。

「ティカ、気持ちは分かるけれど落ち着いて」

エドアルドが千花を宥めるように言つが、あまり効果はなかつたようだ。

「だつて、だつて、だつて！ 異世界召喚なんてされたおかげでわたくしの人生、滅茶苦茶じゃないですかーー！ シモンさん、そんなこと言つうなラグビに家に帰してくださいよー！」

言つてみれば、千花は被害者だ。

間接的ではあるがその加害者のシモンがよりによつて、元の世界でうまくやつていけないとは、思つてはいても絶対に言つてはいけない言葉だ。

「ティカ、うるさい黙れ」

カイルがかつたるそつと手を振ると、千花は途端にしゃべれなくなつた。

「……！……！」

千花がなに」とか叫び、まつとして口をパクパクさせる。やがてなにを主張しようと無駄と悟った千花の瞳から涙がぽろぽろと涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ティカ泣かないで」

エドアルドがティカの頬に流れる涙を指で拭つた。

「第二王子、ティカに勝手に触れるな」

カイルがエドアルドから無理矢理千花を抱き抱えるようにして奪う。

「……へえ」

エドアルドは瞳を見開いた後、面白そうに笑つた。カイルは一瞬それを鬱陶しそうにして見たが、すぐにシモンに向き合つて言つた。「師匠、ティカは俺の弟子だ。それを魔術師団に勝手に入団させることは俺が許さない」

「しかし、飛び抜けた才能があるのに士官させないとは宝の持ち腐れだぞ」

「くどい」

カイルは有無を言わせない口調で、シモンを黙らせる。

「カイルは余程ティカが気に入つてると見えるな。君のそれは独占欲かい？ 確かに彼女は毛色が変わつているが」

エドアルドがそう言って上から下まで踏みみするように見たので、ティカは落ち着かなかつた。

「そうだ、今日の晩餐はこちらで取つていいとい。ティカには今からその支度をしてもらおうか」

「……晩餐は口実で、ティカに装わせることが目的だ。晩餐だけならこの格好で問題ないはずだ」

エドアルドの提案に、カイルが不機嫌そうに眉に皺を寄せた。

「まあ、そうだが。わたしもティカがどんな女性なのか興味があるんだよ。……そうそう、ティカの沈黙魔法はもう解いてくれるかな」

エドアルドは笑つて言つと、侍女を呼びだした。

魔法が解除されたことで、ようやく話せるようになった千花はほつと息をつく。

「ちょっと、無闇に人に魔法なんてかけないでよね」

千花がカイルに文句を付けたら、彼は肩を竦めた。

「激昂する人間にはあれくらいがちょうどいい。おまえ、王子に『だつて』と何度も言つていたぞ」

そう言われてみれば、言つたような気がする。

千花はうつとつまるごと、不敬だつたかとエドアルドをちらりと窺つた。

「わたしなら、全く気にしてないよ、大丈夫」

「……すみません」

エドアルドには幸い笑顔で返されたが、怒りのあまり身分の高い王子にまでハつ当たりしてしまった千花は己の未熟さに身が竦む思いだつた。

「お呼びでござりますか？」

茶がかつた金髪に緑の瞳の落ち着いた感じの侍女が扉を叩いて現れる。

「ああ、セルマ。彼女はティカと言つて、今度カイルの弟子になつた娘なんだが、彼女に晩餐会の支度をしてほしいんだ。それもどびきりのやつをね」

エドアルドがそう言つと、セルマと呼ばれた侍女は驚いたように瞳を見開いた。

「まあ、カイル様の」

カイルのエドアルドへの口調といい、割と身分の高そうな侍女が見せる敬うような態度といい、カイルはひょっとしたら結構身分が高い人物なのかもしれないな、と千花はぼんやり思った。

「それではティカ様、こちらへ」

「は、はい」

セルマに別室の客間へ案内されて、千花はまず湯殿に連れて行か

れた。

一応王宮に来る前に風呂には入っていたのだが、問答無用で数名の侍女達に服を剥かれた。

「ああああのっ」

羞恥も手伝って、千花が戸惑いの声を上げる。

「ご心配されなくとも、最高のお支度をさせさせていただきますわ、ティカ様」

いや、そういうことじゃないんですけれど……。

侍女達に髪や体を念入りに洗われ、千花は半ば諦めの境地にいた。「それにしても、滑らかできめの細かい肌ですわね。お体も細くていられるのに、出るところは出ておられて素晴らしいですわ

「はあ……どうも」

侍女達の褒め言葉につい気の抜けたな返事をしてしまつ千花だが、その間も侍女達は爪を磨いたりして忙しい。

全身をタオルで拭かれ、ようやく湯殿から出たと思ったたら、今度は台に寝かされ、いい匂いのする香油を全身に擦り込まれた。

全身マッサージを受けて千花がウトウトしかけたところ、セルマが声をかけた。

「ティカ様、それではお支度をしますので、ご移動をお願いいたしますわ

「は、はい」

「いけない、いけない。

あまりの気持ちよさに危うく熟睡するところだったよ。

千花は慌てて台から起きあがると、湯上がり用の薄い衣装を着せられて、衣装部屋へと移動させられた。

衣装部屋では侍女の間で、千花には何色が似合うか少し議論になつた後、結局爽やかな色合いの淡い緑のドレスが選ばれた。そのドレスは爽やかさとふんわりとした柔らかさが絶妙で、こういう物が全く分からぬ千花にもかなりの一品だと分かった。

下着や靴はすべて繊細なデザインのものに取り替えられ、侍女達

が千花にそれを着せていく。

あー……、お姫様つてこんな感じなのかな。支度のたびに毎回こんなことあるなんて大変そう。

自分はお姫様でなくてよかつた、と安心しながら千花は目の前に置いてある全身を映す鏡をじっと見ていた。

背中の中程までの真っ直ぐな黒髪は丁寧に梳られ、艶やかだ。横の短めの髪を残して、サイドをドレスと同じ色の細いリボンで編み込んで飾り、髪型は完成のようだ。

仕上げに化粧を施された途端、幼い自分の顔が一変に大人っぽくなつたので、千花は驚いた。

「まあ、なんてお化粧が映える方なんでしょう。とてもお美しいですわ」

「これなら、殿下もきっと満足されますわ」
侍女達が褒めるのも満更お世辞ではないようだ。千花は呆然としてその支度の出来映えを見ていた。

鏡の中の千花は、どこから見ても美しい異国の姫君だったのだ。

……うわへ、化けた……。

姫君そのものの自分に驚きながら、侍女達の技術に千花は素直に感心していた。

「綺麗にしていただいて、ありがとうござります」

ペニリと侍女達に千花が頭を下げるごとに、彼女達は驚いたようだ。「ま、まあ、カイル様のお弟子のティカ様がわたくし達に頭を下げられる」となんてありませんわ。それに、エドアルド殿下の「命令ですし」

「それでも、ありがとうございます」

千花がもう一度頭を下げると、戸惑っていた侍女達がやがて破顔した。

「ティカ様、ゴン寧にありがとうございます。またぜひともあなた様のお支度を担当させて頂きたいですわ」

「あ、はい。もし次がありましたら、よろしくお願ひします」

今回の支度はエドアルドの思いつきで、まあさすがに次はないだろうが。

侍女達に手を取られて、千花はドレスの裾を踏まなによつに慎重に歩き出す。

客間から出ると、いきなり知らない男性から声をかけられた。

「へえ、君がカイルの弟子か。どこの姫君かと思った」

歳は、千花よりも少し年上くらい。十七、八くらいだろうか。エドアルドと同じ色彩で顔も似通っている。

「まあ、レイナルド殿下。ティカ様をご覧になられにいらしたのですか？」

「殿下とこいつとは、この人も王子様なんだろうか？ エドアルド殿下に似ているし。

熱心に見つめてくるレイナルドに向いながら、千花は思つ。

「まあね。あのカイルもさすがにとうとう十宣せざるを得ないと思つてたけど、これは予想外だつたな。……とても綺麗だけど、君はひょっとして、カイルの恋人？」

「と、とんでもない！」

あんな鬼畜魔術師の恋人と誤解されるなんてショックだ。千花が慌てて首を振つて否定する。すると、レイナルドはなぜかほつとしたように息をついた。

「あ、違うんだ。よかつた」

……なにがよかつたなんだろう？

千花が首を捻つていると、レイナルドが千花の傍に寄つてきた。侍女達は遠慮していいるのか声をかけてこない。

「僕はレイナルド、この国の第三王子だ。君の名はなんて言つの？」

千花の予想通り、目の前の青年は王子だつたようだ。千花は城に来る前に教えてもらつた略式の礼を取るべく、ドレスを両手で摘んで答えた。

「ティカ・サターです、殿下」

「ティカか、可愛い名前だね」

「あ、ありがとうございます」

身分の高い王子にかなり気さくに話しかけられて、若干千花は腰が引けた状態になる。……それにせつからなにやら熱っぽい視線を受けているようで、落ち着かない。

「殿下、ティカ様はエドアルド殿下に晩餐のご招待を受けておられるのです」

「そりなんだ。じゃあ、僕も一緒に出ようかな。一人くらい増えても別に構わないだろ？」

「はい。エドアルド殿下にお伝えして、そのように手配させて頂きますわ」

セルマが微笑んで応対する。どうやらレイナルドが晩餐に参加するには、決定事項のようだつた。

「お邪魔するよ、アルド兄さん」

「なんだ、レイド。ティカと一緒に来たのか」

ティ力達を引き連れて、レイナルドが先にエドアルドの部屋に入ると、意外そうにエドアルドが眉を上げた。

「カイルが弟子を取つたつていうから興味があつてね。……そしたらとても綺麗な娘じゃないか」

レイナルドに促されてティカがエドアルドの部屋に入ると、彼は驚いたように瞠目した。

「これは……、見違えたな。ティカ、とても綺麗だ」

「……驚いたな。どこの姫君かと思った」

シモンも千花の変わりように驚いたようで、まじまじと観察していく。

二人に賞賛されたことと、千花はさつきシモンに憤つていたのも忘れ、少々舞い上がってしまう。

「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに千花は頬を両手で包むと、赤い顔を俯かせた。

「……童顔も化粧一つでこれだけ変わるのか」

カイルが舞い上がる千花の気分を一気につき落とすようなことを言った。

「童顔で悪かつたわねっ」

思わず千花はカイルをキッと睨む。

一人のようには褒めるとは言わないが、少し黙つていてほしかった。

「童顔？ ティカはとても美人だけど？」

不思議そうにレイナルドがカイルに目をやる。

「第三王子は化粧に誤魔化されているのかもしけんが、ティカの見た目は十一歳くらいだぞ」

「……なんだ？」

いくぶんがつかりしたようにレイナルドがティカを見る。彼はこ

れがティカの普段の顔だと思いこんでいたらしい。仕方なく彼女は頷いた。

「わたしの本当の年齢は十六ですけれど。わたしの国の人々は他の国の人から見て、総じて若く見られるみたいですね」

「それでも、ティカ様のお肌やお体は素晴らしいですね。十二歳ではこうは参りません。ティカ様のお顔も、いざれ今のように大人っぽく花開く時が参りますわ」

「へえ、そうなんだ」

セルマのセクハラまがいの言葉に、男達が大げさなくらい反応する。じろじろと皆に体を観察され、ティカは思わず羞恥から叫び出しそうになつた。

「確かに体つきはいいね」

エドアルドが世の中の乙女の王子様像を壊すようなことを言つ。

「うん、これなら多少童顔でもいいか」

レイナルドが頷きながらなにとか納得している。

「ああ、そういうば、手足は細いのに胸はあつたな」

最初にあつた時の千花の格好を思い出しているらしいシモンが言った。どこのセクハラ親父だと思いながら、千花はシモンを睨みつける。

「……ティカの体をじろじろ見るな」

カイルがかなり不機嫌そうに言つたが、千花はここに来る前に、彼も千花の体をしつかり観察していたことをもちろん忘れてはいなかつた。

「カイルだつて、屋敷でじろじろ見てたじゃない」

「俺はいいんだ」

「よくないでしょ、そういうのつてセクハラつて言つんだからね」「千花がむつとカイルを見上げながら言つと、彼は眉間に皺を寄せた。……どうやら不満らしい。

「カイル、いくらティカが魅力的でも、弟子に手を出さないでね」レイナルドが釘を差すと、エドアルドもなぜか楽しそうに言つた。

「そう考えると、訓練の時とか危険だね。ティカには師団舎まで来てもらつて訓練した方がよさそうだな」

「それはよいお考えですね、殿下」

未だ千花の入団を諦めていらないらし、シモンが嬉しそうにそれを受けて言つた。

「おい……」

話が妙な方向に向かつて、カイルの機嫌もどんどん悪くなつていく。

「じゃあ、ティカには訓練の際には城まで来てもらおうか。……それでいいね、カイル」

「……仕方ない。俺ももちろん同行する」

有無を言わさず決定するエドアルドの言葉に、本当に嫌そうにカイルが頷いた。

「ついでに他の者にも指導してくれると嬉しいな。無理にとは言わないけれど」

「……無理もなにも、始めからそのつもりでいるんだろうが」

カイルが苦虫を噛みつぶしたような顔で呻くように言つた。

俺様な彼がやりこめられるのは千花にはちょっと小気味よかつた。……エドアルドは人当たりが良さそうに見えるが、ひょっとしたら結構な狸なのかも知れない。

「皆様、お食事の準備が整いましたわ。レイナルド様もお越しくださいませ」

話が一端落ち着いたところで、セルマが別室の客間に皆を案内する。

「ティカ、座つて」

レイナルドが率先して千花のために椅子を引いた。

「あ、はい。ありがとうございます」

王子に椅子を引いてもらつて大丈夫なんだろうかと一瞬千花は不安になつたが、彼に甘えて、結局早々に着席した。

「レイドは随分とティカがお気に入りだね」

エドアルドが千花の隣に着席したレイナルドに楽しそうに囁く。

「うん、まあ。カイルが弟子を取つたつていうから興味本位で見に行つたけど、ティカ綺麗だし、仕草とか可愛いし」

そこまで褒められると、千花はさすがに真っ赤にならざるを得ない。

「そ、そんな」と……

「あ、赤くなつた。可愛いなあ」

にこにこと嬉しそうにレイナルドが笑う。少し離れた席にいるカイルはそれに反比例してものすごく不機嫌そうだ。

「ティカ、僕、君に一日惚れしたみたいなんだ。魔術師を指すのもいいけど、もし君さえよかつたら僕の妃にならない？」

レイナルドがもの凄く大事なことをちょっとそこまで買い物についてくる的に気軽に言つてくれる。

「……はい？」

思わず千花の目が点になつたが、それは誰にも責められないだろう。

う。

「第三王子、なにを言つてゐる。ティカは俺の弟子だぞ。それを無視して勝手に話を進めるな」

カイルが不愉快そうに言つたことで、千花は一瞬真っ白になつた意識を取り戻した。問題のレイナルドは、カイルに対し「ちょっと黙つてくれるかな」などと言つている。

「申し訳ありません。それは無理です」

千花は慌ててレイナルドに答えたが、予想しない返事が返つてきた。

「どうして？ 君は僕が嫌い？」

「どうしてつて……、殿下とはほんの少し前にお会いしたばかりじゃないですか。好きも嫌いもありません。それにこんな不得体の知れない女を妃になんておかしいです」

自分を卑下したくはないが、どこの馬の骨とも知れない女を妃にするなんてどう考へてもおかしい。

それをこうも簡単に言つるのは、もしかしたらこの王子にはすでに何人か妃がいるのかもしない。

「得体は知れなくはないだろ？ 当代一の魔術師のカイルの弟子だし」

千花がカイルの弟子になつた経緯を知らないレイナルドは当然のように言つてくる。

「……わたしは異世界の日本という国の出身です。それに庶民ですし、殿下に釣りあつとは思えません」

「……異世界？」

レイナルドが千花の言葉に驚いたように聞き返す。

「はい、わたしは異世界の人間です。ただ、わたしには魔力が並外れてあつたらしくて、カイルにこの世界に召喚されたんです」

「ティカが異世界人……」

呆然としたようにレイナルドがつぶやく。

千花はこれで諦めてくれるかなと心の中で呟つとする。

「きなり王子妃になつてくれなんて、いくらなんでも身に余りますわる。

「それはす「いね！ カイルよくやつたよ！」

「ええつ？」

ほつとしたのも束の間、レイナルドが両手を握つてきたので千花はびっくりする。

「す「いはともかく、よくやつたとは何事！？」

「見たことのない顔立ちだから、他の大陸出身かと思つたら、まさか異世界から来たなんて驚いた。異世界の人間なんて、初めて見たよ」

それはそうだろう。

そんな機会がやたらあつたら困る。

「……そんなパンダかなにかを見るよつたで見ないでください」

「パンダ？」

レイナルドに問い合わせられて、ああ、この世界にはいないのかと千花は理解する。

「わたしの世界にいる珍獣です」

言いながら、わたしはあんなに可愛くはないけどね、と千花は内心で苦笑した。

「珍獣なんてとんでもない。確かに君の存在は稀少だけど、こんなに綺麗なのに」

「ですから、それは化粧のおかげです。素顔を見たらきつとがつかりなされますよ」

「ティカ、そう卑下する「ともないだつ。君の顔は歳の割に幼いけれど、とても可愛らし」よ」

「第一王子、せっかくティカが断つているのに余計なことを言つたな」
フォローするように千花を褒めたエドアルドに対し不遜にカイルが言つ。

「しかしね、ティカは自己評価が低すぎだよ。彼女はそのままでも充分可愛いし、庶民というが、それなりに教養もあるようだしね」

「あ、ありがとうござります」

エドアルドの褒め言葉に千花が赤くなるのをレイナルドが面白くなさそうに見た。

「アルド兄さん、まさかティカに気があるわけじゃないよね？ 随分彼女に好意的みたいだけど」

「さあ、どうだろ？ だけど、別に嫌いになる要素はないだろ？ 装ったティカはとても美しいし、そのままの彼女もとても興味深い女性だよ」

「……ふうん、否定はしないわけだ？」

レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨む。

自分のせいでなんだか険悪な雰囲気になりそうだったので、千花は慌てて口を開いた。

「あ、あのつ、エドアルド殿下、冗談はおやめください。今すぐ否定して」

「ティカ、わたしも君に興味がある。いろいろとね」
エドアルドはそう言つたが、千花は彼がそう言つるのは恋愛感情以外の理由からとしか思えなかつた。

それなのに、レイナルドをわざと煽るようなことを言つなんて、なにを考えているんだろうか。身分上失礼だとは思いながらも、千花は少しむつとしてしまう。

「……それは、わたしが異世界から來たからですか？ ああ、並外れて魔力が大きいことも関係あります？ もしかしたら、そのことでわたしに利用価値がありますか？」

「おいおい、ティカ。殿下に対して失礼だぞ」

それまで傍観していたシモンが慌てたように言つたが、千花は黙つてエドアルドをじつと見ていた。

「……これは手厳しいね」

エドアルドは驚いたように瞳を見開くと、次には苦笑した。

「本当に君は興味深い」

エドアルドが一瞬だけ熱い視線を送ってきて千花は少しうつろたえ
る。それを見逃さなかつたレイナルドがエドアルドに宣言した。

「いくらアルド兄さんでも、ティカは渡さないよ。兄さんに妃候補
はいくらでもいるだろ？」

「あのつ、レイナルド殿下、誤解です。エドアルド殿下はわたしの
ことはなんとも思つておられませんから」

「ティカ、わたしは君のことを興味深いと言つてゐるだろ？ そ
れがなぜなんとも思つてないことになるんだい？」

慌てて取り繕つとする千花に、エドアルドは楽しげに言つた。

「エ、エドアルド殿下、で、ですから、おふざけはやめてください
これはさつきの反抗的な態度への反撃だろ？」

もはや面白がつているとしか思えないエドアルドに、千花は狼狽
えまくる。

「……王子達、いい加減に晚餐に入りたいんだが。食事を取りなが
らでも会話はできるだろ？」

不機嫌そうにカイルが会話に割り込むと、エドアルドがくすりと
笑つた。

「ああ、そうだね。せつかくの食事が冷める」

とりあえず自分を取り巻く妙な雰囲気が少しだけ和らいだので、
千花はほつとする。

直球なレイナルドはともかくとして、エドアルドの思わせぶりな
態度は心臓に悪すぎる。

「ティカ、ここは食事は大丈夫そうかい？」

エドアルドにそう言われて、千花は大皿に盛られた料理を見る。
どうやらここでの食事は大皿から自分の皿に取る形式のようだ。

「はい、大丈夫そうです」

料理もそんなに元の世界と変わりはないのだ。食事のマナーも
よく分からぬ千花は少しだけほつとする。

「ティカ、取つてあげるよ」

レイナルドがかいがいしく千花の世話を焼く。

「あ、ありがとうございます」

レイナルドは気を利かせたのか全部の大皿から料理を取ってくれたので、千花は食べきれるか不安だったが、味も元の世界のものとそう変わりはなく、おいしく食べられた。異世界でも料理がそんなに変わらないなんて不思議なものだ。

「ティカ、もつと食べる？」

「もう充分です。というか、お腹いっぱいです。」」ちやうさまだじた

「もう？ 小食だなあ」

そう言つてレイナルドは見ていて気持ちよいくらい食べている。

他の男性陣も結構食べていて、確かにこの中では小食になるかも、と千花は食後のお茶を飲みながら苦笑した。

「それはそうと、ティカ。妃の件、考えといて。僕は君がその気になるまで待つから」

一応断つたはずだが、レイナルドには千花を諦める気は全くないようだ。

千花はレイナルドを見上げると、先程の自分の考えを彼にぶつけてみた。

「……殿下には、他にそういう方いらっしゃるんですか？」

「そういう方って、妃のこと？ いないよ。僕が妃にしたいと思ったのは君だけだ」

あまりにも簡単に言うから、てっきり他にも妃がいるのかと思つたら、レイナルドは結構身持ちが堅いらしく。

「そうなんですか？ わたしはてっきり何人も妃がいらっしゃるのかと思つてました」

「酷いな、僕はそんな無節操な男じゃないよ。妃は一人だけだと決めてるし」

「す、すみません。軽率でした」

いかにも心外なことを言われたとばかりに憤慨するレイナルドに

対して千花が小さくなる。

けれど、その一人だけに選ばれてしまつた千花は、事の大きさに気づいて慌てて言つた。

「で、でも、わたしはいざれ家に帰るんです。ですから殿下のプロポーズはお受けできません。召喚魔法を覚えなければならぬので、何年もかかるかもしませんけど」

「駄目だよ。君は帰さない」

千花の言葉を遮つてレイナルドが真剣な顔で言つてくる。千花はその様子になんとなく不安を覚えて彼を呼んだ。

「……殿下？」

「帰るなんて駄目だ。カイル、ティカに召喚魔法を教えるな」
思いもかけず強権を振りかざすレイナルドに、千花は震えた。
もし、彼に本当にこのまま帰れないようにされてしまつたらどうしよう。

「レイド、気持ちは分かるけど、それはティカには酷だよ」

エドアルドが諭したこと、レイナルドがはつとしたように千花を見た。千花は瞳に涙を溜めながら小さく震えていた。

「……レイナルド殿下、わたしは帰りたいのに酷いです」

「ティカ、ごめん。君を傷つけるつもりはないんだ。僕は君が好きで、だから……」

レイナルドの腕が千花を抱きしめようと動くが、それはなぜか途中で止まった。

「第三王子、食事の席でティカになにをする気だ。俺の弟子を勝手にどうこうするのは、いくら王子でも許さない」

どうやらカイルがレイナルドの動きを止めたようだ。

「分かつた。今はなにもしないから、カイル、拘束魔法を今すぐ解け

レイナルドが顔をしかめて命ずると、カイルはすぐに魔法を解いた。

『気をくだけれど、レイナルドの『うごめく』にも王子然としていて千花は戸惑つてしまつ。

そのレイナルドは物事を見極めるよつにカイルをじつと見つめながら言つた。

「……カイル、君も弟子を心配するにしては態度がおかしいな。それは君もティカのことが好きだからなんじやないか」

「……邪推するな、王子。ティカの強大な魔力には興味あるが、それ以外の感情は俺にはない」

「そうです！ そんなことありえません！」

鬱陶しそうに否定するカイルの言葉に千花は頷くと、拳を握つて力説する。

「カイル、行く当てのないわたしに、弟子にならない場合は生活の保障は一切ないなんて言つんですよ？ 好きな娘にそんなこと言つ人なんていますか？ いないですよね？」

「ここぞとばかりに千花は王子一人に同意を求める。

「なんだって？ ティカにそんなことを言つたのか、カイル」
レイナルドが怒りと呆れの中間のような顔になつて、カイルを問いつめる。

「それは……」

カイルは気まずそうに視線を彷徨わせた。

あー、俺様のカイルのこんなうるたえる姿が見れるなんて最高だわ！

千花は嬉しさのあまり、事の顛末を王子達にしつかりと伝えておくことにした。

「ええ、はつきり言いました！ その時のシモンさんも酷いんですよ。カイルに弟子をとれって言つたのはシモンさんなのに、どうにかしてくださいって頼んだら、カイルにどうにかされるのが怖くてわたしを保護できなって言つたんですよ。信じられないですよね！」

丞先がカイルから急に自分に変わったシモンがぎょっとしたように千花を見る。

「ティ、ティカ……」

「……シモン、君はカイルの師匠だろう。どうやら初めから諦めて

いたようだが、なんとか彼の手綱を取ることもできたんじゃないかな？相談してくれれば、わたしにも責任の一端はあるし、こちらでティカを保護したのに」

エドアルドが情けないとばかりに溜息をつく。叱責を受けている時のシモンは冷や汗をかいている。

ふふふ、さまみる。二人とも、わたしの苦悩を少しでも思い知れ。元の世界に何年も戻れないことになって、すっかりやせぐれていった千花は、心中で暗い笑みを漏らしていた。

だが、その心情とは逆に、千花の瞳には大粒の涙が溜まり、その姿は哀れではあつたが可憐で、王子達の同情を一心に集めていた。「弟子の件を了承してなければ、今頃わたし、路頭に迷つてたかも。このままじゃ野垂れ死ぬかもと思つて嫌々ながら弟子の件を了承したんですよ。そんな非道なことをするカイルがわたしのこと好きなわけないじやないですか」

「そ、それはそうかもな……。好きな相手にそんなことはしないよな」

「そうです！ ありえないですが、もし仮にそうだとしても、こんな顔だけ鬼畜魔術師なんて絶対にお断りです」

「おい、ティカ……」

千花の暴言にカイルが周りの空気をビキビキと凍らせていくが、知つたことじやない。

初めて会つたときはその超絶美形ぶりにじつかり見とれてしまつたが、今となつてはそれは人生最大の汚点だ。

「二人とも否定はしないところを見ると、事実なんだな。……ティカ、つらい思いをさせて悪かつたね」

エドアルドが溜息をつくと、千花に頭を下げる。

「えつ、そんな、エドアルド殿下、そんなことされないでください」

「

千花はエドアルドの行動に、びっくりして思わずうろたえた。

「しかし、仕官できないなら魔力の高い弟子を取れと最初に言った

のはわたしだ。シモンはそれをカイルに伝えたにすぎない。……もちろん、その経過には問題はあつたけれどもね」

エドアルドは一見庇つてゐるようだが、はつきりシモンを責めていた。シモンが更に小さくなる。

それでも、自分の責任はきちんと認めて身分が高い彼が庶民の千花に頭を下げて謝罪までしてくる姿に、千花は感動した。さつき彼に反抗的な態度を取つてしまつたのは悪かつたかもしれない。

「エドアルド殿下、頭をお上げください。今回のことは殿下には予測されないこじだつたのでしょうか？ わたしは殿下に怒ることなんてできません」

「しかし、それではわたしが納得しないよ。……なんだったら君を王宮で保護して、ああ、もちろん待遇も出来るだけのことをするが、どうする？」

「それはいいね、アルド兄さん！」

嬉々としてレイナルドがエドアルドの案に賛成する。

「え……、でも悪いです」

王宮での生活なんて堅苦しいだらうし、それにうまく溶けこむ自信もない。

狼狽える千花に、エドアルドは諭すよつて言ひ。

「……ティカ、君にはこの世界のことを早急に知つてもいらない必要がある。それには、ここにいた方が手つとり早いと思つよ。教師も揃つてゐるしね」

「でも……、せつかくカイルの屋敷の人を紹介してもらつたのに。あ、それと自転車！ たまには乗らないと壊れちゃうかも」

乗らないことで滅多に壊れはしないとは思うが、たまには整備くらいしないと。唯一元の世界から一緒に来たものだ。あれが壊れたら、ちょっとど ciòか、かなり寂しい。

「……自転車？」

「一人の王子が不思議そうに聞いてくる。

「わたしが召喚された時に乗っていた乗り物です。出来たら、それで街も見て回りたかつたんですが」

「へえ、それどんなの？」

レイナルドが興味深そうに言つと、カイルが屋敷に置いてあつた自転車を召喚してきた。

「へえ、これが自転車か

「かなり精巧な作りだね。どんな構造か是非調べてみたいものだが」「壊さないでください！」

エドアルドの言葉にぎょっとして千花は思わず叫ぶ。

「壊さないよ、大丈夫。構造を調べるだけだ」

王子二人がどうやつて乗るのか聞いてきたので、千花は簡単に説明する。

「……そうか。しかし、先程来ていた服ならともかく、これにドレスで乗るのは無理じゃないかな」

「え、わたし、ドレス着るんですか？」

「君はわたしの客人扱いにする。普段着るのももちろんドレスだ。今君が着ているようだね」

「えええ、そこまでの待遇にしていただきなくとも結構ですっ」「まさかそんなお姫様待遇なんて思つていなかつた千花は、思わず飛び上がつて驚いてしまつ。

「駄目だよ、君は異世界から来ているというだけでも結構な重要人物なんだよ。……そうだな、週末だけでもカイルの屋敷に行けるようにならうか。君の警護にはカイルがいるから、街に下りても大丈夫だろ？」

「あ、ありがとうございます」

とりあえず、先程言つた希望は聞いてもらえた千花はほつとする。城ではお姫様待遇というのがかなり気になつたけれど。

「余計なことだ。ティカは俺の屋敷で面倒を見る」

「カイル、これはわたしからの命令だ。週末にティカを君の屋敷にやるのも、こちらとしてはかなりの譲歩なんだよ。言いたいことは

山ほどあるだろうが、文句を言わずに素直に聞いてほしいね」
穏やかだけれど有無を言わせないエドアルドの口調に、カイルが口を噤む。

「……分かった」

やがて、不承不承というようにカイルが頷いた。

さすがに不遜なカイルでも、王子の命令には逆らえないらしい。だったら、もう少し口調にも気を使つてほしいと他人のことながら千花は気になつてしまふ。

「そしたら、君の部屋を用意しなければいけないね。……セルマ、すぐ手配出来るかな」

「はい、先程使用した『婦人用の客間が空いておりますので、すぐティカ様にいらしていただいても大丈夫でございます』

「そうか。では、ティカにはそこを使ってもらひ。……ティカもそれでいいね？」

エドアルドに一応確認されたが、すでにこれは決定事項のようだ。

「はい」

千花が頷くと、レイナルドが嬉しそうに声をかけてくる。

「ティカ、これで毎日君に会えるね」

「はあ……」

千花は突然の事態に少し呆然としてしまつて、思わず氣のない返事をしてしまつた。

「週末は城にはいないがな」

「お忍びで行くから問題ないよ」

この王子、ひょっとして街まで付いてくる氣だろうか。

千花は少し驚いてレイナルドをまじまじと見てしまう。

「警護が面倒だから、第三王子は来るな」

カイルが冷たく言つが、レイナルドに堪えた様子はない。

「自分の身は一応自分で守る氣でいるけどね。それについて、カイルは当代一の魔術師と言われてゐるのに、ずいぶん自信がないんだな」
ああああ、そんな喧嘩を売るようなことを！

案の定むつとするカイルと、それを挑戦的に見つめるレイナルドの間で火花が散った気がして、千花ははらはらする。

「レイド、王子の顔がお忍びでそんなに街に下りるのは問題だよ。程々にしないと」

「……分かったよ」

エドアルドに宥められて、レイナルドは渋々頷いた。

しかし、これで城とカイルの屋敷での生活を余儀なくされた千花はそつと溜息を付く。

……無理矢理城に滞在させることを決めさせたけど、エドアルド殿下も強硬にはカイルにわたしを家に帰せとは言わないんだな。

「ティカ、どうした？ 不安かい？」

溜息を付いたのをエドアルドがめざとく見ていたらしく、千花に聞いてくる。

「いえ、わたしを家に帰してくれれば、問題は解決するのになと思つていただけです」

「ティカ」

そう言つた途端にレイナルドが悲痛そうに見えてきたので、ティカは内心うろたえる。

そんな捨てられた子犬のような目で見ないでほしい。

「俺はおまえを帰す気はないぞ」

カイルがこう言つてくるのは想定内だつた。けれど、エドアルドが次に言つた言葉は薄々感じてはいたが衝撃的で、千花は瞠目する。「……まあ、唯一異世界召喚が出来るカイルがこう言つている以上、無理だと思つね。それに君に恨まれるのを覚悟で言つが、わたしもまた君を帰したくないと思つていいんだよ」

「アルド兄さん、やつぱりそななんだ？ でもティカだけは譲れないよ」

レイナルドがむつとしてエドアルドを睨んだ。

「譲るも、譲らないも、選ぶのはティカだろう？」

エドアルドのおふざけは未だ続行中らしい。

千花は頭が痛くなつてきた気がして、こめかみを押さえる。

「あの、お言葉ですが、わたしは誰も選びませんよ。わたしは家に帰るんです」

「ティカ……」

きつぱりと千花が宣言すると、レイナルドは情けない顔になる。

「それから、エドアルド殿下、そうやってからかうのはおやめください。余りすぎますと、『兄弟の仲が悪くなつても知りませんよ』

「それは困るね」

千花の忠言にも堪えた風はなく、エドアルドは肩をすくめた。
「でも、君の存在は稀少でおまけに魅力的だし、帰したくないと思つてもちつとも不思議ではないだろ？」

「おい、第一王子、ティカを口説くのはやめろ」

カイルが間に入つてくるけど、口説いてるところはちょっと違うと思うなあ、と千花は考える。

「……言つておきますが、わたしに異世界の知識を期待しても無駄ですよ。一応九年の義務教育は終了しましたが、専門的な知識を持つていいわけでもないですし」

「この国にも五年の教育の義務はあるけど、九年は長いね」

「そうですか？ みんなその上の学校に行く人がほとんどですが。わたしも高校に通つて一年目でしたが、このままこの世界に滞在する、退学することになりそうですね。出来れば大学まで出たかつたんですが。義務教育までの中卒じゃ就職にも相当不利ですし」

まあ、元の世界に帰つた後で、大検を受ければいいのだろうが、それでも戻つたら戻つたで前途多難そうだ。

「それに、今は大学を出ても就職が大変らしいですし、本当にこの状況は困りますよ」

千花が思わず溜息を付いていると、シモンが我が意を得たりとばかりに嬉しそうに言つてきた。

「だから、魔術師団に入ればいいじゃないか。そうすれば、少なくとも生活に困ることはないぞ」

「絶、対、に、おことわりです」

千花はわざと強調して言つてやる。まだ、この人は諦めてないのかと、千花は冷たい目でシモンを見る。

「僕の妃になれば、そんな心配することないのに」

レイナルドが期待を込めて見つめてくるが、そういうんじやないんだよなあ、と千花は心の中で溜息を付く。

「……そういう問題じやないんです。わたしが生きる場所はある世界なんです。それにわたしの国では、この歳で結婚するには親の許可が必要ですから。……第一、結婚するなら二十代半ばくらいでがわたしとしては理想なんですが」

「女でそれでは行き遅れだぞ」

呆れたようにカイルが言つてくる。

そうか、この国では結婚適齢期はもつと早いのかもしれない。

「そうなの？ わたしの国では普通に結婚しない人も増えてるけど。経済的な理由もあるし、他人と生活する必要を感じない人もいるみたい」

「……そなんだ。随分とティカの国は変わってるね。これは、妃の件は長期戦でいかないと無理そうだなあ」

カイルへの説明を聞いていたレイナルドが溜息を付く。

「まあ、高校のことも問題なんですが、一番の問題は、あまり長くこの世界に滞在することになると、行方不明者として、元の世界で死んだことになってしまふことですね。まあ、戻りさえすれば、そ

れも取り消されはするでしょうけれど、下手したら、葬式とか挙げられたり、まだうちには墓はないので、そのためにわざわざ墓を建立されたりするでしょうね。帰った時に、墓誌にわたしの名前が刻まれたりしてたらものすごく微妙ですよ

千花がこれから敵しい先行きを想像して、難しい顔で言つ。

「……墓誌？」

一同が不思議そうに千花に聞いてくる。

「日本は国土が狭いので、墓地の土地代も馬鹿にならないんです。だから、以前は個人で墓を建てたりしてたんですけど、今は家族単位で立てる人が多いんです。だから今は墓標とは別に、墓誌に亡くなつた人の氏名やら没年月日を彫つたりするんです」

「へえ……、そなんだ。王家では個人で墓標を立てるけどね」千花の言葉を興味深そうに聞いていたレイナルドが言つ。

……そもそも一般庶民と王家の間では身分が違いすぎるのだから、比べるのが間違つた。王家では遺体安置用の施設もあるだろうし。

「つかぬことを聞きますが、レイナルド殿下、死んでないのに、墓標に『自分の中前が刻まれていたらどんな気分がしますか？』

「え……、それは、嫌な気分かな。勝手に殺すなつて憤るかもしねない」

「そうですね。……わたしも今まさにそんな気分です」

千花がそう言つと、一同は一斉に微妙な顔になつた。

もしかしたら、自分がそうされた時のことを想像したのかもしれない。

「とにかく、わたしは早急に帰つつもりです。出来たら、三年くらいで。仕方ないので、もちろん死にものぐるいで魔術を教わる気ですが」

「ティカも結構意固地だなあ。ここにいたら、生活の心配もないのに」

レイナルドが帰るなと言外に言つて、千花を見る。

「それはそうですが、向こうにはわたしがいなくなったら心配する親とか友人がいるんです。ここにくる前にも、買い物に行つてくるつて言つて、出でいつたきりになつてゐるし。さつと今頃、うちの家族、心配してますよ。そんな人達を残して、のほほんと生活するなんてわたしには出来ませんよ」

「まじめだよねえ」

どう説得しても、家に帰ると主張する千花にエドアルドが苦笑する。

「そういうえば、ティカは向こうで大学に行きたいと行つていたが、普通に通つていたら何年学校に通うことになるんだい」

「えーと、高校三年、大学四年で、全部で十六年ですね。その上の大学院とかもあります、さすがにそこまでは行くつもりはありますせん」

「それにしても、ティカの国の教育体系はすうじね。もう少しつつこんで聞きたいくらいだ」

「……わたしは専門的なことは分からないと、申し上げたはずですが。わたしに聞かれても役に立ちそうなことはありませんよ」「いや、それは話を聞いてからこちらで判断するよ。ティカがなんとも思つていないうちに、こちらにはとんでもない情報と言つこともありえるしね」

「つ、疲れた……」

あれからエドアルドは、教育のことやら、日本の政治のことやら、世界情勢などをかなりつっこまれて聞かれ、千花はすっかりしどろもどろになつて、結局最後には「わたしはごく一般的な女子高生なので分かりません！」と言つて部屋から飛び出してしまつた。

セルマが慌てて千花の後を追つて、彼女の部屋まで案内してくれた。

もう疲れたので寝ます、とセルマに言うと、彼女は納得したように頷き、千花の化粧を落としてから、いかにも上等そうな絹の寝間着を着せた。

千花は初めて見る天蓋付きのふかふかのベッドの上で、しばらく飛び跳ねてはしゃいでいたが、やがてそれにも飽きて、シーツにくるまつた。

「明日、ティカ様付きの侍女を紹介いたしますね」

セルマは地位が高そうと思ったら、侍女長だった。なので結構忙しいらしく、新しく一名の侍女がティカに付くことになつたらしい。そんなに人数はいらない、と千花は断つたが、もうエドアルド殿下が決めたことですからと、あっさりと断られてしまった。

あー、これもお姫様待遇か。

こんな小娘一人に、そんなにいらないと思うんだけどな。そうこうするうちに、セルマは部屋を退出して、千花は一人ぼつんと残された。

あー、無断外泊か。怒られるかな、これ。

ケータイも持たずにこの世界に来たことはまずかつたかなと一瞬思つたが、どう考へても電波が繋がるとは思えない。

いつ帰れるのかな、わたし。

千花は、ふとそう思つと、自然と涙が溢れてきた。いろいろありすぎてそんなに泣く暇はなかつたが、一人になると、やはり家族や友人のことが思い起こされて、千花は涙を流した。

帰りたい、帰りたいよ。

千花を召喚して帰さないカイル、魔術師団へ入団するように薦めるシモン、カイルに召喚魔法を教えるなというレイナルド、元の世界に帰したくないというエドアルド、みんな酷いと思う。

保護してもらったことは感謝はしているが、彼らに対してもス黒

い思ひがないと言えどもせむり嘘になる。
千花はその感情を追い出すように頭を振ると、シーツを引き被つ
てかなり長い時間泣いていた。

異世界Ⅰ|田田の朝。

……体がだるい。それになんだか熱っぽい気がする。

昨晩遅くまで泣きはらしていた千花は、寝返りを打ちながら思つ。

「ティカ様、おはようございます」

「よくお眠りになられましたか?」

千花がだるくてベッドに横になつたままでいると、寝室に新しい侍女と思われる一人の女性がノックして入つてきた。

日本人よりも濃い黒髪黒目を持つ女性と、栗色の髪に濃い青色の瞳を持つ女性。一人とも見たところ二十歳そこそこいらしかつた。

「あ……、おはようございます」

千花は慌てて起きよつとして、へりじと田弦を起こし、再びベッドに沈んでしまつた。

「……ティカ様?」

一人が慌てたように千花の傍に駆け寄つた。

「まあっ、ティカ様、お熱がありますわ」

栗色の髪の侍女が千花の額に手を置き、驚いたように叫つた。

「お疲れが出られたのでしょうか。……ティカ様、食欲はござりますか?」

黒髪の侍女が聞いてきた言葉に、千花は首を横に振つた。それだけ頭がクラクラする。

「……あまりないです」

とにかくだるくて、食欲は感じない。

「医師をすぐに寄越しますわ。エイミ、ハロルド様をお呼びして」

「ええ、ティアナ」

どうやら黒髪の侍女がエイミ、栗色の髪の侍女がティアナという

らしい。

しばらぐして五十代くらいの医師と思わしき人物が訪ねてきた。

「ティカ様、お加減はどんな感じですかな」

「……とにかくだるいです。あと少し頭が痛いかも」

「ふむ」

ハロルドと侍女達が言つていた人物は少し考える素振りを見せる
と、千花の口を開けさせて喉を見た。それから彼は体温計に似たも
のを出してきた。

「お熱を計つて頂いてもよろしいですかな」

「……異世界でも体温計つてあるのか。」

千花はぼうつとしながら、それを受け取つた。

「……脇の下に挟めばいいんですか？」

「はい、そうです」

どうやら、使い方も元の世界と一緒にようだ。異世界なのにちよ
つと面白いなど、具合は悪かつたが千花は少し笑いたくなる。

千花が熱を計つているその間に、ハロルドは彼女の手首になにや
ら巻いて測定しているようだ。

そろそろいいでしようと言われて千花はハロルドに体温計を返す。
「風邪のようですね。昨日から王宮に来られたことで、疲れも出た
のでしよう。少し熱が高いようですから安静になされください」
「はい、ありがとうございます」

千花はベッドに横になりながらハロルドに礼を言つ。

それから侍女達にいろいろ指示した後、ハロルドは帰つていった。

「……ティカ様、食欲はないとのことですが、スープは飲めますか
？」お薬も飲まないといけませんし

「あ、はい」

エイミに起こしてもらつて、ティカはぼうつとしながらも「ほさ
ないよう」に注意しつつ、コーンスープに似たものを口に運ぶ。

「……これならなんとか口に入れられそうだ。」

震える手でスプーンを持ちながらスープをすくい、なんとか全部

飲み終えると、粉薬を一包み渡された。

「熱冷ましですわ。後でカイル様にも来て頂きますので、かなり症状は良くなるれると思います」

白湯で熱冷ましを飲んだ千花はなんでカイル？と首を傾げた。

「あの、カイル、来るんですか？魔術を教えに？」

「まあ、ティカ様の具合がお悪いのに、そんな訳はありませんわ。カイル様にはティカ様に治癒魔法を掛けていただくのです。……それと、ティカ様、わたくし達に敬語は不要です。どうか普段通りに振る舞われてください」

それから、ディアナとエイミが紹介が遅れましたが、とそれぞれ挨拶をしてくる。

エドアルドの客人で、高名な魔術師のカイルの弟子であるティカは、王宮でもかなりの重要人物であるので、一介の侍女である彼女達に敬語など使われると、逆に困るそうだ。

千花は少し迷つたが、エドアルドの客人という立場もあるし、これは彼女たちの希望通りに振る舞つた方が良さそうだと判断した。

「それではティカ様、よくお休みになられてくださいませね。もし、具合がお悪いようでしたら、そこにある呼び鈴でわたくしどもをお呼びください。すぐに参りますから

「うん」

千花は呼び鈴を確認すると頷いた。

「それではおやすみなさいませ、ティカ様」

「うん、おやすみなさい」

千花が再びベッドに横になると侍女達は退室していった。

「ああ、こんな時に早速風邪引くなんてついてないなあ。それにカイルに魔術を早急に習わなきゃいけないのに。」

千花は自分の情けなさに溜息を付くと、徐々に襲つてきた眠気に身を任せた。たぶん、薬の中に眠くなる成分でも入つっていたのだろう

う。

次に千花が目が覚めた時には、ベッドの傍にカイルが立っていた。

「……カイル？」

「治癒魔法を掛けたが、気分はどうだ」

言われてみれば、だるさがだいぶ無くなつたようだ。

「うん、だいぶ良くなつたみたい」

今度は自力で千花はベッドから身を起し、すると、なぜかカイルが少し動搖した。

「おまえは何か羽織れ。その格好では体の線が丸分かりだ」

「そうは言つても……」

周りを見渡すが、羽織るようなものはない。千花は呼び鈴で侍女を呼び出した。

「まあ、気が付きませんで申し訳ありません」

エイミが慌てて千花に纖細な刺繡のされている上等そうな肩掛けを羽織らせた。

「それで、カイル様、ティカ様の具合は良くなられましたのでしょうか？」

「ああ、心配ない。疲れもあるだろうから、三日は療養した方がいいが」

カイルの言葉に千花は驚いて目を見開く。

「まあ、それでは殿下にティカ様の体調が快方に向かわれたことをお知らせしてまいりますわ」

エイミが心底安心したように言つて、千花の寝室を出ていった。

「三日も寝てなくちゃいけないの？ 今日一日休めば大丈夫だよ」早く魔術を覚えて元の世界に一刻も早く帰らなければならぬ千花は気が焦つていた。

「……無理はするな。おまえのこの症状は、たぶん異世界を渡つた

衝撃のせいでもあるんだろう?」

「……そうなの?」

「ああ。異世界召喚は対象物に負担を掛ける場合もあるからな」

「それが分かつてて、召喚するなんて酷いよ」

カイルが鬼畜魔術師だとは分かつていたが、そんな説明もされていなかつた千花は憤る。

「ああ、そうだな」

その千花の怒りにカイルはかなりあつさつとした応えを返した。

「……それだけ?」

「悪いとか、すまなかつたとか謝罪はないの?」

召喚して千花が魔法を覚えるまで帰す気はないと宣言しているカイルに半ば諦めてはいたが、このときの千花は具合が悪いせいもあって、カイルの態度にかなりいらいらしてしまつた。

「そうだなつて、それだけ? セめてすまないぐらこ言つたりどりなの。カイル、酷すぎるよ」

瞳に大粒の涙を溜めて千花が訴える。

「……そうだな」

それでもカイルからの謝罪はない。

千花は具合が悪いのやら、この先の不安やらを全て彼への憤りに変えてカイルを詰つた。

「わたしが今こんな目に遭つてるのは、全部カイルのせいなのに。カイルなんて大嫌い!」

「……そうか」

一瞬、彼が寂しそうな顔になつたと思ったのは千花の気のせいだつたか。だが、千花はそれをあまり気にせずニカイルに言つた。

「出てきたそれは懇願。

「わたしを帰して。帰してよ」

千花は泣きながらカイルに訴える。

「すまない。それは出来ない」

俺様なカイルが初めて謝ったが、元の世界に帰してくれなければ、結局意味はない。

千花はぽろぽろと涙をこぼしながらカイルを責めた。

「酷い、酷いよ。カイル、酷い」

「ティカ、あまり気が高ぶるとまた具合が悪くなる」

誰のせいなの、と千花は叫びたかったが、カイルにそっと額を指で押された。

すると、急激に眠気が襲つてくる。どうやらカイルが魔法で何かしたらしい。

くたりと力が抜けた千花の体をカイルが支えた。

千花の頬に涙が伝う。眦になにか柔らかいものが押し当てられたが、千花には確認するすべもなく、深い眠りに落ちていった。

「カイル、やっぱりティカのことが好きなんじゃないか」
カイルは意識のない千花を寝台に横たえると声のした方に振り返つた。

寝室の入り口にはエドアルドとレイナルドが立っていた。
「意識のない女性の眦に口づけるなんて、普通弟子にはしないな」
エドアルドが言うと、カイルは少し眉を顰めた。

「……それがどうした」

「開き直りか。けれど、ティカは渡さないよ。僕の妃にするんだ」
「ティカは俺の弟子だ。第三王子の妃にはさせない」
「それは、おまえがティカのことが好きだからだろう? カイル」
睨み合う二人の脇をすり抜けて、エドアルドがティカの頬に伝う涙を拭つた。

「かわいそうに、ティカ。かなり気に病んでいたんだね」
「ティカに触れるな」

カイルの不遜な態度にもエドアルドは特に気にした様子もなく、涙の跡の残る千花を見つめていた。

「まあ、皆様、ご病気の方の寝室で騒がれるのはおやめくださいませ。隣室にお茶をご用意いたしましたので、そちらにお越しください」

セルマが寝室に入つてきて諫めたことで、とりあえず険悪なその場は収まつた。

「……俺は帰る。ティカは三日は療養させろ」

「そう言つと、カイルは移動魔法でその場から消えた。

「なんだよ、これから追及しようとしてたのに逃げるなよ」

「……レイド、ティカの素顔を見たのに態度が変わらないな」

エドアルドが意外そうに眉を上げて言つと、レイナルドは頷いた。

「うん、確かに顔立ちは幼いけれど、やっぱり十一歳には見えない

よ。それに、カイルに帰して欲しいと懇願した時のティカは今まで見た以上に艶つぽかつたし。僕の彼女への気持ちは変わらないよ」「確かに、あの時の彼女には思わずぞくりとさせられたな。セルマの言うとおり、いざれ彼女は美しく花開く時がくるのだろう。数年後には求婚者がひしめいているかも知れないな」

「そんなことにはさせないよ。彼女は僕の妃にするんだから。……アルド兄さんにも手を出させないよ」

エドアルドは挑戦的なレイナルドの言葉には答えず、話題を変えた。

「……しかし、ティカはカイルの言うとおり三日は療養させるとしても、しばらくはあまり過密な予定を立てない方がいいな」

エドアルドは顎に手を当てて考えるように言つと、話題を変えられたレイナルドも不承不承頷いた。

「そうだね、あまり無理はさせない方がいい。なんといつても、ティカには慣れない環境なんだから」

「まずは礼儀作法と魔術を習う」とくらいいか。それでもティカには大変だろうけれども彼女に頑張つてもううしかないな」

エドアルドが小さく息をついて言つと、レイナルドは彼女の身を案じながらも同意した。

それから三日後。

千花の部屋の隣の客室で、朝食会が開かれていた。

侍女によつて千花は再びお姫様そのものの格好をさせられている。

「ティカ、もう体の方は大丈夫かい」

「はい、もうすっかり。」心配をおかけして申し訳ありません

千花はエドアルドとレイナルドに頭を下げた。

「かなり疲労が溜まつていただろうから、君は謝らなくてもいいんだよ。君の体調のことまで気が回らなくて申し訳なかつたね」

エドアルドに頭を下げる千花は慌てた。

「そんな、エドアルド殿下、わたしに頭を下げるられないでください。そんなことされたら困ります」

「そうか、ではとりあえずやめておこう」

「冗談めかして言われて、千花も思わずくすりと笑った。

「あ、あとお二人ともお花ありがとうございます」ざいました。なにもする事がなかつたので、とても嬉しかつたです」

三日も療養することになつて暇を持て余した千花は読書でもするかと本を広げたが、言語疎通の指輪は文字までは面倒を見てくれなかつたようだ。

当然なにが書いてあるか分からぬ千花は、所狭しと花瓶に生けられた花々を眺めて過ごした。

それに、毎日王子一人が訪ねてきてくれてかなり助けられた。

こんなことになつた原因のカイルはあれから姿を見せなかつたが、ひょつとして大嫌いと言つたせいなのかもしれないな、と千花はふつと思つた。

そのカイルも一応悪いと思つたのか、彼から大きな花束が連日届けられていた。

「ティカは花が好きなのかい？」

「え、まあ、人並みには好きです」

エドアルドに聞かれて、千花は頷く。

「そうか。なら、庭園に君を連れていいこうか。こここの庭園は手入れが行き届いているから、君も楽しめると思つよ」

「そうなんですか？ 是非見たいです！」

そんな娛樂があるなら是非見たい。

千花はエドアルドに喜色満面の笑顔で言つた。

「ああ。じゃあ、この後行こうか」

「はい」

思つてもいなかつた展開に、千花はにこにこして頷いた。

「でも、驚いたよ。君がいきなり高熱を出して寝込んだんだから。

良くなつて本当に良かつたよ」

レイナルドが急に話題を変えると、千花は彼に手を取られる。

「あ、あの……っ」

千花が彼の熱っぽい視線に戸惑つていると、エドアルドが助け船を出してくれた。

「レイド、ティカが困つてゐるだろう。その手を離せ」

「……アルド兄さんがそう言つるのは、ティカに氣があるからだろう？ ティカに触れさせたくないからだ」

「……確かに、わたしはティカに惹かれているし、彼女に触れさせたくないはないな」

「……はい！？」

予想もしなかつたエドアルドの言葉に千花は驚いて、思わずエドアルドの顔を見た。

「ティカ、いきなりで驚くかもしれないが、わたしは君を妃にしたいと思つてゐる」

「……これは、殿下のからかいの延長だろうか？ うん、そうに違いない。」

千花は自分で納得する答えを見つけると、心中で大きく頷いた。
「エドアルド殿下、わたしをからわるのはおやめください。言わ
れていい冗談と、そうでないものがあります。殿下のこの「冗談は
たちが悪いです」

「……まいつたね。わたしは求婚のつもりで言つたのに、冗談にさ
れてしまつとは」

「きゅうこん、求婚！？」

千花は心底驚いてエドアルドの顔をまじまじと見つめた。彼の顔
は真剣そのものだ。

千花が彼の視線に思わずひるんではいるが、レイナルドがエドアル
ドを挑戦的に睨んで言つた。

「ティカに求婚したのは僕が先だ。アルド兄さんにティカは渡さないよ」

二人の王子の間で火花が散つた氣がして、千花はあたふたする。

「ビビビヒヨウ、こんなときほびひしたらー」

つまく働かない頭で千花は、先程エドアルドが言った庭園の「」とを思い出した。

「あ、あのつ、わたし、庭園に行きたいです！ それも今すぐ！」

なんとか一人の王子の暴走を止められた千花は安堵の息を付いていた。

二人に案内された庭園は確かによく手入れされていてとても綺麗だ。緩やかな風が花びらを舞い上がりさせて、幻想的でさえある。

……しかし、チューリップとムスカリが咲いているその近くで、もう少し花期が先と思われるハーブと薔薇の花が咲いていて、季節感がまるでない。

……こここの植物体系はどうなつてるんだと千花は首を捻りつつ、それでも美しい花々を堪能した。

「あ、桜！」

まさか異世界で桜を見られるとは思わず、千花は歓声を上げる。
「ティカは桜が好きなのかい？ それなら、少し離れた場所に立派な桜並木がある。よければそのうち案内するが」

「そうなんですか？ ゼひお願いします！」

エドアルドの提案に、千花は一も二もなく飛びついた。

「もちろん、僕も付いていくよ。アルド兄さんばかりに良い思いをさせたくないし」

「レイド、おまえは呼んでないぞ。……まあ、聞かれた以上仕方な

いか

エドアルドが本当に仕方なさそうに苦笑する。

「まあ、エドアルド様、レイナルド様、おはよ(フ)イ(ゼ)ー(ム)」
ふいに柔らかな声がして三人はそちらに振り返った。
そこには波打つ淡い金の髪と水色の瞳のとても綺麗な貴婦人がいた。

「おはようございます、義姉上」

王子一人が義姉上と呼ぶところを見ると、この人物は未だ千花が会つたことのない王太子の妃のようだ。

「黒髪に焦げ茶の瞳。とても綺麗な方ですけど、そちらにいらっしゃるのは、もしかしてカイルのお弟子ではないですか?」
そう言われて初めて千花は目の前の人物がカイルによく似ていることに気が付いた。

もしかしてこの人は 。

興味深そうに自分をまじまじと見つめてくる人物がカイルの関係者ということを感じ取り、千花はしばし呆然としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177ba/>

魔法の国のティカ

2012年1月13日15時50分発行